清野吉光氏のコラム 第66回

団塊耕志録

清野 吉光（きよの よしみつ）略歴

1950年　長野県四賀村生まれ、松本深志高校卒業。1968年上智大学外国学部ロシア語科入学、1971年　中退。その後印刷関係など様々な職業に従事。1976年清水市の日の丸交通入社。1980年静岡市内の事務機器センターに入社。1982年システムオリジンを仲間と創業、専務取締役。1992年代表取締役社長就任。2000年㈱タクシーサイト創立、現取締役会長。2007年タクシーアシスト代表取締役社長に新任。現在に至る。

「グアム」の3つの顔

観光の島、グアム

このコラム第63回の「レジリエンス」（今年2月号）で、紹介させて頂いた、大雪の為に実現できなかった武内工業所グループの社員旅行が、武内社長の強い想いで再挑戦、この5月15日から三泊四日で、しっかりリベンジ！御蔭で清野も初めてのグアム旅行を楽しませて頂き、天候にも非常に恵まれ、南国の常夏の別世界を堪能する事ができた。

グアムは成田から飛行機で3時間半ほどの南太平洋の島だが、レッキとしたアメリカ合衆国（準州）であり、銃を腰に下げた、空港職員が入国をチェックする。左右の指10本の指紋をしっかりとられ、目の虹彩までチェックされる。あらためて、グアムがテロの警戒に厳しいアメリカであると実感。しかし一旦空港を出ると、アロハシャツに身をつつんだ現地の人と外国人観光客が闊歩し、まばゆい太陽が輝く、海洋リゾート地そのものである。あまりマリンスポーツに縁の無い自分でも、何故か開放的で、うきうきした気分になる南国特有の雰囲気に溢れている。島の高台にあるグアム国際空港から、旅行会社のバスで15分もかからずに、プライベートビーチを抱えたホテルとショッピングセンターが立ち並ぶ中心街に着いてしまう。当然アメリカだから英語の看板は当たり前だが、それ以上に目立つ日本語の看板が溢れている。町行く車も8割方は日本車だ！ちょっと嬉しくなる。この小さな島に年間100万人以上の観光客が訪れるそうだが、航空便で訪れる乗客の7割が日本国籍、また観光収入の9割以上が日本からだという。自分にとってはグアムというのは遠い存在だったが、バブル崩壊後には減ったとは言え、如何にグアムが日本人に人気があり、経済的に非常に密接な関係があるかという事を改めて知った。確かに、日本には無い（沖縄を除いて）南国の別世界だ！多分自分一人では決して来る事はなかっただろう（何せ、海が似合いませんので…）このグアムに来る機会を与えてくれた武内グループの社員旅行に、改めて感謝！。

巨大軍事基地、グアム

のどかな南国のリゾート地としてのグアム、しかし、ひとたびグーグルマップで島全体の航空写真を見てみると、島の3分の1はアメリカ軍の巨大軍用地である。北側には3000メートルの滑走路を2本持つアンダーセン空軍基地。アメリカ海軍の原子力潜水艦が事実上の母港とするアプラ港もあり、アメリカ軍の東アジア、南アジア全体をカバーする戦略的要衝でもある。また在日米軍再編の影響により、沖縄本島に常駐するアメリカ海兵隊7000人も移駐する予定で、現在、基地の拡張工事が行われている（この移駐の為の費用の59％を日本政府が負担するそう）。しかし、この巨大軍事要衝グアムという世界は、グアムの街中では全く感ずる事はできない。メイン通りでは米軍の軍用車や軍人は、まず見かけない。現地のガイドさんの話では、

基地外への兵士の外出は固く禁止されており、普通の観光客が、グアムを世界有数の軍事拠点として実感する事はまずないであろう。

その意味で、体験や現場を自分の目で見るという事は確かに大事だが、しかしその一方、その体験や現場が、現実の一部でしかないという事も考えておかねばならないと改めて感じた。グアムが巨大な軍事基地であるという知識がなかったら、多分、このエメラルドグリーンの素晴らしい海に囲まれた天国のようなところが、一方でアジアのもっとも枢要な軍事拠点であり、戦略爆撃機B52が常駐している事は、想いも寄らないと思われる。「蟻の目」を持つと同時に「鳥の目」を持つ必要性をあらためて、このグアムという奇異な島を見て感じた。

慰霊の島、グアム

グアム観光の二日目、現地のガイドさんによるグアム島一周のバスツアーがあった。ガイドさんはサイパン出身のチャモロ人のベテランおばさん（63歳）。独特の日本語で、日本語ができたお母さんから教えられたと言う、日本の歌を（特に独自に？考えた替え唄を）随分、歌ってくれた。そのガイドさんが観光地巡りの最後に是非寄ってみてくれと言って、連れて行ってくれたところが、グアム平和慰霊公苑というところで、日本の南太平洋戦没者慰霊協会が立てた慰霊塔と諸宗教合同の平和の祈りの家（我無山平和寺）があるところだった。日本の歴史教育では、現代史までたどり着かない内に授業が終わってしまう場合が多く、我々団塊の世代でも、日本の現代史に疎い。このグアムを含む南太平洋の海と島々で日本軍と米軍との熾烈な戦闘があり、一般民間人も含め50万人もの人が亡くなり、その多くが遺骨の収集もままならない事をあらためて、この公苑の説明文を見て知った。またあの横井正一さんが潜んでいた島がこのグアムであり、その洞窟が観光地になっていた。不覚な事に自分の頭の中で、南国リゾート地のあのグアムと戦争の深い傷跡を残すこのグアムとが全然結びつかないまま、こうして歴史の中で起きた現実を目のあたりにして、非常に複雑な気持ちを持った。我々の親の世代の日本人がここで壮烈な戦い（それは確かに侵略戦争と総括されるのかも知れないが…）を行い、そして斃れ、朽ち果て、骨も拾って貰えない人もいる。是非はわからないが、慰霊は我々日本人がやらずして、誰がやると改めて思った。

グアムは、ある意味歴史の島であり、政治の島であり、軍事の島であり、そしてまたリゾート観光の島でもある。チャモロ人の民はマゼランがグアムに上陸して以来、スペインの支配を受け、さらに1898年の米西戦争によってアメリカの支配に変わり、1941年の真珠湾攻撃の5時間後に日本軍の侵攻を受け、大宮島（だいぐうとう）となり、1944年8月に日本軍が玉砕、米軍が奪還して、以後の日本本土爆撃の拠点となった。そして戦後の冷戦の中でアメリカ軍の太平洋上の要石となり、一方で皮肉な事に、経済的に復活した日本の観光地として繁栄するようにもなった。目の前のパウダーサンドの砂浜とエメラルドグリーンの透明な海と青く澄んだ空が続くこの風景と、歴史の中で起きた多くの悲劇と、そして今なお島の北部に広がる巨大な軍事基地に、自分の中で整理できぬまま、とにかく全部をそのまま現実として受け止めて、どの事実にも目をつぶらずに、見つめて行きたいと思う。多分、グアムに限らず、世界の現実、世界の歴史は、こうした正邪で簡単に整理しきれない事ばかりだと思う。その中でも、「割り切り」に逃げずに、強く前向きに生きて行きたいものだと、改めて思った。

（2014年5月21日記）